

平成 30 年度

事業所名 : グループホームおもつべ

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390200210		
法人名	医療法人仁泉会		
事業所名	グループホームおもつべ		
所在地	岩手県宮古市田老字重津部34番77		
自己評価作成日	平成30年10月22日	評価結果市町村受理日	平成31年1月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.mhl.w.go.jp/03/1/ndex.php?action=kouhyou_detail_2018_022_kani=true&ji_gyosyoCd=0390200210-00&PrEfCd=03&VerSiOnCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号
訪問調査日	平成30年11月20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

昔ながらの季節の行事、旬の食材を活かした食事などを提供し懐かしんで頂いています。自然に囲まれているので、春には山菜、秋には栗拾いをし、天麩羅や栗しぼりなどをつくり、季節を楽しみ、暖かい日はウッドデッキでゆったりと昼食を楽しんでいます。介護予防教室(こびりの会)の継続により、地域住民の参加人数も定着してきており、ホーム内で運動会を開催し、地域住民と入居者様、ご家族様が同じ競技を行い交流を深めている。また、認知症について理解を深めていただくために、認知症サポーター養成講座の開催時には、ホームで作った寸劇を取り入れ、地域住民に伝えている。認知症緩和のために学習療法を行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

国道45号線から少し入った小高い丘の上にある事業所では、ホールに利用者、職員が集まり、水平線から昇るご来光に1年の幸せを祈願することから、新しい歳が始まっている。数年前に市職員の勧めで始めた、事業所を会場に一月おきに開催している介護予防教室「こびりの会」は、田老地区の人々が認知症を理解するばかりでなく、回数を重ねることにより、今では9人の利用者がホストとして「お客様」と普通に話を交わす交流の機会にもなっている。市内にある法人事業所の中核となる介護老人保健施設は、日々の大型乾燥機の使用から重度化した際の対応に至るまで、事業所運営を具体的に支えている。「いつも笑顔で共に歩いていきましょう」とする理念の下、職員は、子育てしながら安心して従事できる職場で、利用者の笑顔を糧としながら、笑顔を絶やさずより良い介護に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

[評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

平成 30 年度

事業所名 : グループホームおもつべ

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員心がけ(目配り、気配り、心配り)を常に意識し、入居者をはじめ、地域住民、ご家族と共に笑顔で歩んでいけるように努めている。	理念「いつも笑顔で共に歩いていきましょう」は、既に職員のものとなっている今日でも、誰しもが目につくようにホールに掲示され、家族や介護予防教室に訪れる地域住民への宣言文となっている。来訪者から「楽しいグループホーム」との感想さえ聞こえる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ホーム内の行事には地域の方の参加があり、利用者は顔なじみの方と楽しい時間を共有しており、社会との繋がりを感じていただくために、買い物や外食に出かけている。	開所時に地域とのご縁は全くなかったが、地道な声掛けや行事案内で、次第に交流が図られてきている。田老保育所や田老小学校の発表会に出掛けているほか、恒例の運動会では、会場の事業所ホールは、毎年他法人のグループホームの関係者を始め40人もの方々が集い、笑いと熱気に包まれている。	「こびりの会」、運動会、バーベキューと事業所を会場として職員が一丸となって開催している様々な行事は、地域との繋がりのみならず、ホスト役の利用者にとって、日常の生活では得難いものとなっております。これからも、事業所が目指すグループホームの姿を思い描きながら、創意工夫を凝らし尽力されることを期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	介護予防教室(こびりの会)を継続し、認知症サポーター養成講座では寸劇を取り入れ伝えた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地域代表、家族へホームの活動状況絵を報告し市職員に参加して頂き要望や、アドバイスをいただき今後の活動に繋げている。警察、保育所などの参加もあり、良い意見交換の場になっている。	市担当者のもとより、保育所、駐在所、地域代表、家族代表に加え、田老地区のグループホーム職員も参加し奇数月に開催している。事業所からも職員が交代でその事業所の運営推進会議に出席し、相互に研鑽の機会としている。委員は職員の労働環境、災害時の対応を話題にする事が多い。委員助言がきっかけで数十万円の除雪機を購入し、車の出入りが円滑になっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	介護予防教室(こびりの会)の継続と、運動会は、包括の方にも参加して頂き、定期的に田老地区の各事業所が集まり意見交換を行っている。	開業1年後に市の勧めで始めた介護予防教室「こびりの会」は数年を経て地域に定着し、さながら地域の集会所の様相を呈している。今春に開設された田老地区の地域包括支援センターを中心に、地域の関係機関が情報を共有し、相互に助け合う塊づくりが地域のテーマと、次に向けてホーム長や職員は考え始めている。	

[評価機関 : 特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内、ホーム内で研修や勉強会が行われており、職員は理解し実践している。また、家族には契約時にそのリスクを説明し同意を得ている。	所定の身体拘束廃止指針の策定、定期の研修実施、委員会の設置・開催は既に整っている。入居時に昼間の施錠無しは勿論、一切センサーを使用しない事、そのため転倒する場合も在り得ることを説明し予め家族の同意を得ている。事業所では、日々戸外に出ようとする利用者には寄り添い一緒に敷地内を散策し、また、入居者が起き上がることが分かるように、センサーに代えて布団に小さな鈴を下げている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内ホーム内で研修が行われており、職員はそれを理解している。また、スタッフ間で、フォローし合い、利用者が穏やかに過ごせるように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在は利用されている方は無いが、法人内、ホーム内で研修があり参加している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には説明をし、不安や疑問点にかんしては一つ一つ答え納得して頂いてからサービスを利用して頂いている。入居後もその都度対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議、行事等の参加を促し、来設時に伺っている。遠方の家族に対しては、電話などで(毎月のお知らせは全員発送)細かい様子を伝え、要望等を伺っている。	事業所来訪時や電話で聴く家族の要望の殆どは、利用者の健康に関連する内容で、特に血糖値の高い方の食事や運動についての要望が多い。家族は、事業所を信頼し安心していることもあり、転倒や打撲の報告にも概して家族は好意的に受け止めてくれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の業務会議での意見交換、年3回の個人面談にて職員の現状把握に努めている。連絡ノートや改善ノートの活用により多くの意見が出るようになった。	職員の意見等は、申し送り時やカンファレンス又は業務会議の席で話され、「利用者のふらつき対応と改善」など、日々の介護の改善に関する内容が多い。理想の職員数の確保には至っていないが、職員の協力の下で職員のリフレッシュや子育て中の職員の事情を考慮したシフトの編成、変更を心掛けている。	連絡ノート・改善ノートを有効に活用し、入居者の小さな変化も的確に受け止め、全職員に伝わり日常のケアに活かされている。今後も職員の意見・提言等を職員間で共有しながら、介護の質の向上に努められることを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	希望休を受け優先している。管理者と職員間の信頼関係深めるように、定期的に食事会を行い、現場から離れた場所で言いやすい空気作りをしている。改善ノートには相手に対しての感謝や、労いの言葉が溢れており、職場環境をよくしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員個々の経験、力量に応じた研修参加、資格取得を全面的にバックアップしている。ホーム内では担当を決め、毎月勉強会を開催している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	田老地区の事業所が2ヶ月に1回集まり意見交換している。他グループホームの運営推進会議に参加し、意見交換している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	申請時、ケアマネ、家族から生活歴や困っている事を聞き取り、見学や行事への参加などで、納得して頂いてから利用を勧めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前調査、可能であれば、自宅訪問し家族が納得いくように説明し、分からない事があればいつでも対応できるように電話番号を伝えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前調査後、担当者会議を開催し、本人にとって一番良い方法を話し合っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	春には表の土手に山菜を摂りに一緒に出掛け、秋にはホーム横の栗の木から落ちた栗を拾い、調理の際は、魚のさばき方をお願いして教えて頂いたり、職員の悩みを聞いてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	バーベキュー・運動会・新年会の際は家族に連絡し参加していただいている。また介護度5の方の入浴については浴槽から上げれない事で、ご家族と本人にとって一番良い方法はなにかを話し合い実践する事にした。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	通い慣れた病院・美容院・デイサービスへの外出等できる限り支援している。季節ごとのドライブでは、懐かしい場所や景色を観れるように努めている。	利用者のうち田老地区出身者は3人いるが、震災で街並みが壊滅し、懐かしい場所は昔遊んだ浜辺、馴染みの人は以前通っていたデイサービスのお友達と美容室の人ぐらいになっている。家族の来訪は少ないが、運営推進会議のメンバーや介護予防教室、運動会に参加する地元の方々とは親しい関係が出来てきている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合った同士で座ったり、困っている人を見ると自ら手を貸す光景を目にします。また、利用者同士の些細なトラブルには、仲裁に入り最後はジョーダンを言い皆を笑わせてくれる利用者もいます。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ホームから老健に移った方へは、定期的に出向き声掛けをし、家族とも話す機会がある。入院された時は、病院へ様子を伺いに行き、亡くなられた時は、時の経過をみて家族が体調を崩してないか電話でお声を聞くように努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人や家族からの訴えが無い時や、周辺症状が強くなってきた利用者は24時間シートを使い時間と、本人の言動、係った職員の言葉と対応を分析し課題分析表に落とし込み、本人の気持ちをくみ取れるように努めている。	特定の課題のある利用者について、概ね3週間程度、時間の流れに応じた様子、影響を与えていると考えられる事、介護者の願いを24時間シートに克明に記し、利用者の思いの把握に有効に活用している。同時に利用者を観察する職員の意識にも変化が見られ、介護全般にいい影響を与えているとしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケアマネ、家族から聞き取りをし、課題分析表に記入し、出来るだけ生活のリズムを代えないように、安心して暮らせるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎月定期的にカンファレンスにて評価を行い出来る事、出来ない事、好きな事、嫌いな事などを職員間で話し合い、共有している。もと大工だった利用者には草取り用の椅子を作っていたことで自信を持ち、周りから感謝された。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当ケアマネ、家族、サービス提供者から事前に聞き取りした結果から問題抽出し、入居後は本人の発言、行動から気持ちを察し、職員間で話し合い実践に繋げている。状態の変化に応じその都度プランの見直しを行っている。	どの利用者についても、不安なく安心して生活できる環境を目指す計画づくりを基本としている。昨年度から24時間シートを本格的に活用して課題を分析し、担当、全職員、ケアマネの各段階の評価を経て計画書として取りまとめている。家族には来訪していただき、その都度意見を伺っている。	入居者の課題を見つけて対応することにより、不安な気持ちが収まったり、帰宅願望が落ちついたりと変化がみられ、今後も工夫を凝らしながら継続していくことを期待します。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	朝、夕の申し送りや、職員間(申し送りノート)で情報を共有している。(見たら必ずハンコを押す)		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の希望や様子から、馴染みの場所に出かけたり、家族に会えるように、段取りをしている。また、外出の時間を設け気分転換をに努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	田老地区の文化祭に、ボランティアの協力を得て作品作りに取り組んだり、大道芸人に来設して頂き楽しい時間を過ごしている。また、保育所へ出向き運動会や学習発表会を見学している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	自宅にいる時のままの主治医に継続して通院している方もいる。また、病状によっては県立病院に紹介して頂いたり、家族の希望により専門医を受診している。	協力医である県立病院の田老診療所をかかりつけ医とし、予約日の通院は職員が買い物 がてら同行している。母体の介護老人保健施設の看護師が、毎週健康管理のため来訪している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護師と24時間連携しており、週1回の訪問看護師に受診内容、日常の様子を報告。急変時には、状態を連絡し指示を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院治療が必要な場合は、主治医から県立病院を紹介され治療を受けるようになる。その際は、医療連携室の職員と連絡を取り合い、病状を把握しホームに戻るよう、または、長期入院になる場合は、退院後の受け入れ先を確保し、安心して治療が受けられる様に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に対する指針を入居時に説明し、同意をいただいている。個々の病状や主治医の判断によるが本人と家族の気持ちに寄り添いその都度話し合い相談をしながら本人にとって一番良い方法を考え支援して行く。	看取りを経験した結果、「最後は、自宅で」と事業所として考えるに至った。ホームで出来る限界は「自分の口から食べることが出来るか否か」を目安としている。今現在、差し迫っている利用者はいないが、その場合には、家族と話し合いを重ねて、本人、家族にとって最善の方法を模索することとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ホーム内にAEDを設置している。状態が悪化している利用者に対しては個別の緊急時マニュアルを作成する事としている。また、ホーム内で「緊急時の対応」について勉強会を行っている。職員は全員、救命講習会を受けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、避難訓練を行い、利用者に合った誘導方法を話し合っている。通報装置には地域住民2名の電話番号が入っている。自然災害時の避難のマニュアルを作成し共有している。避難時に持っていくものは、ある程度準備してある。	市のハザードマップでは、危険地域として指定されていない。近所住民こぞって協力してくれるまでには至っていないが、自動通報装置により、職員に加え近隣の2軒にも緊急連絡が届くようになっている。夜間想定訓練は実施済みである。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	トイレ介助、移動介助の際は本人のプライドを傷つけないように、心掛けている。特に便失禁の場合は、利用者は職員の表情に敏感なので、本人の気持ちになり細心の注意を心がけ声掛けしている。	誘導、介助には細心の注意をして、言葉使いにも気を付けている。6人の入居者は誘導が必要であり、心配りをしながら支援をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	意思表示をはっきり伝えられる方には、できる限り思いに沿うように努めている。出来ない方に対しては、個別ケアにて聞き取れるように配慮している。また、昼食にバイキング形式にして、本人に選んでいただけるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	帰宅願望が強い方には、納得いくまで職員が付きどこまでも歩き、落ち着きがなくそわそわしたり、表情が陰しくなる方には、気分転換で散歩に誘い外の空気を吸ったり、いつもと違う景色を観ることにより落ち着きを取り戻せるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	地域の美容院が来て定期的にかットをしている。1名は定期的に染とパーマをかけるため、外出している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	旬の食材を使い季節を感じながら、一緒にキッチンに立ち、盛り付けや、刻みなどをして頂いたり、魚をさばいてもらったり、ゴマをすってもらったり、お茶碗拭きやテーブル拭きそれぞれに行っていたいっている。	利用者は、下膳、テーブル拭き、食器拭き、刻みづくりを担当するばかりではなく、手際よく生鮭を三枚に卸せる方もいる。職員と一緒に三つの食卓を囲み、談笑しながら食事している。外食恒例の回転ずしや夏に事業所内で楽しむ8種類のバイキング料理は、その度に、ホーム長が食べ過ぎを心配する程、利用者には好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取、水分摂取量は毎日記録し、不足している場合は好みの味でこまめに取れるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	1日3回口腔ケアをしている。上手に出来ない人には職員が丁寧にブラッシングをし、清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表にて排泄パターンを把握し、失敗しないように、個別に声掛けしている。また、夜間尿量が多い方に対しては、本人に合ったパットを使用している。	介護度が高くオムツを使用している1人を除き、トイレを利用している。家族の負担を少しでも少なくするため、個人に応じたパットを選択し、また利用者によっては安心して朝まで休めるパットを使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の原因はそれぞれ違うため、その人に合った対応をしている。散歩の時間を増やしたり、海草、ゴマ油、朝起きがけのお茶や、水の摂取。できるだけ下剤は使わず自然排便ができるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は毎日入れるように準備している。拒否が見られたり、テレビに夢中の方には、時間をおいてから声掛けしている。	毎週3回、1日4、5人が午後から入浴し、洗濯も同時に行っている。異性介助を嫌ったり入浴を避けようとする利用者は今はいない。入浴は利用者と職員が打ち解ける時間にもなっている。入浴介護は原則として1人の職員が担当しているが、介護度等に応じて臨機応変に対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後居室で横になって休む方もあれば、気に入った場所で休息を取る方もいる。夜間の居室の温度や湿度に注意し、体調を崩さず安心して休んでいただけるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	2ヶ月に1回薬剤師による薬剤勉強会に参加。個々の病名・内服薬は把握している。状態により薬が変わった時は、変わった理由・考えられる副作用などを、必ず連絡ノートに記入し、職員全員が共有する。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯、たたみ、食器拭き、食事の準備や片付け、草取り、大工仕事、それぞれ行っている。また、姉妹や、友人と会話ができるように行事へ参加して頂き、楽しい時間を過ごして頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	食材購入のために一緒に買い物に出掛けたり老健でのイベントには参加し楽しまれている。年2回は外食の日を設け全員で回転寿司やレストランに出かけている。家族に連絡して外出の機会を作ってもらっている。	天気の良い日は、4人程度の利用者を努めてドライブに連れ出している。ホールに接する広いウッドデッキは、利用者が日光浴を兼ねてパターゴルフやプランターの手入れをする貴重な場として活用されている。	海に面したウッドデッキは、利用者の日光浴の場であり、車椅子対応の避難通路としても有効に活用されており、隣接する場所に小さな菜園を用意することを一考されたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ホーム内持込は禁止しているが、家族の了解のもと所持している方は、実際本人が使うことはほとんど無いが持っているだけで安心している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば電話を取り次いだり、不穏状態のときは家族の声を聞いて安心していただけるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有スペースは自由に動けるように仕切りが無く、一目で全体が見えるようになっている。居間は日当たりも良く、それぞれ居心地の良い場所で過ごしている。天気の良い日は、ウッドデッキで昼食を摂ったり、歌を聴きながら、椅子を並べて日なたぼっこしている。	太平洋を望むホールは、十分な採光のもとエアコン・パネルヒーターで室温も快適に保たれている。職員の数が限られる場面であっても、居室を含め、利用者を把握できるレイアウトとなっている。お手製の飾りびなが吊るされ、壁にはボランティアの方の協力で、利用者が制作した見事な色紙飾りが飾られている。朝夕の消毒清掃がなされ、勿論、気になる異臭などない。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ゆったりと座れるソファ、畳間、1人でゆっくり横になれる場所、お茶を飲みながら職員と会話ができるカウンター。季節ごとにディスプレイは工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	亡くなられた旦那様の位牌を置いてる方もいる。家族の面会時には、写真を撮り、それを居室に飾り、常に家族との繋がりを感じていただけるように工夫している。	クローゼットと洗面台、パネルヒーター、エアコンが備え付けられ、電動ベッドと小箆箭、椅子が各居室に用意されている。持ち込んでいる物は少ないが、事業所で用意したカレンダーを壁に貼り、思い思いに、家族写真や大切な手紙などを飾っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室が分からなくなる方には、目印をつけたり、頻回にトイレに行く方は、トイレに近い居室にし、失敗しないように工夫している。		